

K

「楓の風」らしい看護の取り組みを発信

在宅療養支援
楓の風

KAEDE TIMES 2026

在宅生活を支援するー私たちの試行錯誤



ー在宅を支える全てのみなさまへー

私たち、「楓の風」スタッフが、どのような想いで在宅支援をしているのかを、一人でも多くの方に知っていただきたい！と思い、

「楓の風」らしい取り組みをご紹介します、ニュースターをはじめました！



Case 10

30年近く、外に出ることができなかつた方がいます。

人と目を合わせることも難しく、会話は「はい」「うん」で終わってしまう日々。

長い年月をかけて訪問看護でのコミュニケーションを重ねた結果、少しずつ心を開いてくださった事例のご紹介です。

ケース

若い頃の精神的ストレスから、対人恐怖があり、長年外出が困難だったAさん

若い頃に受けたショックから外出ができなくなり、ご主人亡きあと、**社会との接点は訪問介護だけ**という状況。体調不良もある中で医療とのつながりがなく、訪問看護の導入が始まりました。

訪問看護介入当初は、対人恐怖があり、

「はい」「うん」の返答だけ…



といった状況で、人と関わること自体がとても難しい状況でした

訪問看護における支援の姿勢

そんなご様子の中にも、**ふとした瞬間に見せる小さな微笑み**や、新聞の広告をみている姿。

そこに、この方の「好き」や「楽しさ」の種があると感じました。

私たちは、なにかを改善することを一度やめ、代わりに選んだのは、「**一緒に楽しむこと**」

「計算問題を一緒に解く」「間違えたら一緒に笑う」「すごいですね!」とその場で伝える。

看護師が共に笑い・悔しがり・喜ぶ。その姿を見て、少しずつ表情を変え、

声を出し、感情をみせてくださるように変化しました。



その後の経過と気づき

ある日を境に、少しずつ「歌が聞きたい」「ストレッチがしたい」

などの意思表示をしていただけることが増えてきました。

別の日には、訪問時に玄関まで来て、スリッパを出してくださるまでになりました。

そこからは、**掃除機をかけたり、庭の草むしりをしたり、ヘルパーさんと買い物に出かけたり…**

30年近く閉じていた世界が、少しずつ外に広がっていきました。

本当に必要だったのは、単なる医療介入ではなく、

「**安心して他者と過ごす時間を重ねること**」楓の風のスタッフは、

そんな関わりをこれからも大切にしていきたいと思えます。

在宅「療養」支援